

一、青木君を憶ふ

岩 崎 彦 彌 太

思ひがけない青木君の訃を聞いてから早くも一年にならうとして居る。自分が始めて青木君を知つたのは今から二十年以上も昔の事で、あれは大正七年の夏の事だつたと思ふ。相州大磯町の小學校の運動場でテニス(軟球)をやつて居る時、教へてもらひたいと云つてやつて來たのが青木君だつた。

多分慶應の普通部か豫科一年生位でテニスもまだ始めたばかりだつたと見えて一向に上手ではなかつたが、夏の暑い盛りに中々熱心に練習をして居たので色々コーチをしたのを覚えて居る。従つて青木君のそも／＼のテニスの手ほどきは先づ自分がやつたと云つても差支へないわけである。しかしその翌年再びその小學校のコートで會つた時にはもう驚く程上達して居た。青木家の別荘は山の方にあり、自分の邸は丁度同家から小學校のコートへ行く途中に當るので同君は毎日の様に自分を誘ひに來たものであつた。

その後青木君は大井俱樂部と云ふ當時軟球では都下有數の強い俱樂部へ入り、益々腕を磨いて居た様で、帝大で自分の後衛であり同窓でもあつた永井君がその俱樂部の主將であつたので、自分も時にはそこへ行き従つて青木君とやる事もあつた。當時同君は既にその俱樂部の有力なメンバーとなつて居たが負けるときつと「どうも昔

教はつた人とやると當らなくて苦手ですよ」など、云つて居た。

硬球を始めてからの同君は衆知の通り忽ち日本一流の選手となり、卒業して三菱銀行へ入社してからも中々活躍をして居た。三菱には毎年一回全国の代表選手八人を集めて社内選手権を争ふテニス試合があつて、自分が優勝盃を出して居る關係上、H・Iカップ試合と呼ばれて居るが、青木君は入社の方に先づ優勝しその後も二回優勝した様に憶えて居る。

自分もその頃まだテニスをやつて居たので青木君と組んで全日本とか全關東とか云ふオープントーナメントへ出た事もあつた。亦東京ローンテニス倶楽部のトーナメントにはいつも組んで出場し優勝した事も二三に止まらなかつた。ローンテニス倶楽部の試合で今でもよく憶えて居るのは、元のテニス選手の清水君と慶應OBの神山君の組と決勝戦、混戦又混戦をやつた時の事である。丁度自分が眼を少し悪くして居て眼帯をしたまゝ、試合をやるに云ふ始末で、たうとう夕闇のため翌日へ持ち越し二日目も相當もつれたが、結局残念乍ら自分達の組が負けにしまつた。

パートナーとしての青木君は實に信頼すべきプレイヤーであつた。目も足も早く決斷力に富み、ボレー、スマッシングは決定的で、殊にバツクのスโตรークは定評があつただけに素晴らしいものであつた。不得手のフォアハンドもダブルスの時はほとんど破綻を現さずしばしばエースを出して居た。

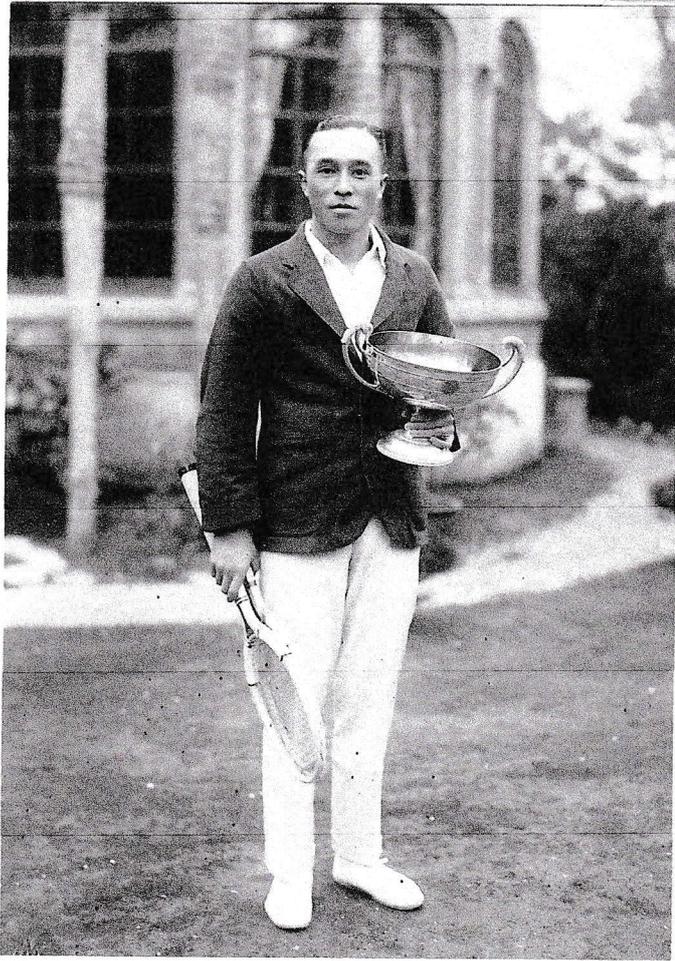
自分が感心して居る事は青木君が決して必要以上にパートナーの領域を侵さない事だつた。身體のよく效く腕

に覚えのあるプレーヤーはとかく出しやばつてパートナーのボールにまで手を出したがるものだが青木君にはさういふ點は少しもなかつた。しかもカバーすべきはカバーし決めるべきボールはよく決めて居た。これは中々出來ない事だと思ふ。

青木君が銀行のロンドン支店詰となり、始めてロンドンへ着いた頃自分も丁度南米視察を終へてロンドンへ立寄つた。あれは昭和五年の多分十月と覚えて居る。早速一緒に組んで有名なロンドンクイーンスクラブのカバードコート選手權大會へ出場した。名にし負ふ英國庭球界の名物トーナメントだけに有名無名の選手が澤山出場しラウンドが進んで準決勝戦で當つたのは英國デヴィスカップ選手で同國のナムバーワンたるオースチン、オリフ組であつた。相手にとつて不足はないので二人共随分頑張つたが、何分インドアの板張りのコートには不馴れのため各セット共非常な接戦をしたが結局敗れたのであつた。しかし當時の新聞雜誌は青木君のプレーを賞讃して曰く、「長い航海の疲れがぬけて充分な練習を積んだ時はその力量恐るべし」と評して居た。

青木君が内地へ歸つて、大阪支店詰となつてからはあまり會ふ機會も無かつた處、昨年五月突然の訃報を聞きあの頑張りの效く身體でどうして病ひに負けたかと夢の様な氣がした。

今後我が庭球界のため亦實業界のために大いに役立つ人と期待して居つたのに誠に哀悼の念に堪へない次第である。



青木 岩雄（1901年9月3日～1939年5月2日）

兵庫県神戸市出身。大正13年慶應義塾大学卒業、三菱銀行入行。

1920年代から1930年代にかけて日本男子テニス界を代表した選手の1人であったが、昭和14年、腸閉塞症のため37歳半の若さで急逝した。

主な成績は、1924年の第3回全日本テニス選手権男子ダブルス優勝、1932年のウィンブルドン選手権男子シングルス4回戦進出等。HI盃は3回優勝している。（1924、1927、1929年）

1930年7月から1935年3月まで三菱銀行ロンドン支店に勤務していたことから、イギリス開催のテニストーナメント、とりわけウィンブルドン選手権で優れた戦績を出した。

左記は、追悼文集「青木岩雄君」への岩崎彦弥太様の寄稿文。